2023
6
令和5年6月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻358号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

# さあ言おう

公益財団法人
さわやか福祉財団

子どもを生み育てやすい社会の条件整備を

# 子ども・子育て市民委員会
# シンポジウム第２弾を開催しました

去る４月24日、子ども・子育て市民委員会は昨年11月の発足シンポジウムに続き、第２弾シンポジウムを会場とオンラインの併用で開催し、約300名の皆様にご参加いただきました。

**たくさんのご参加、ありがとうございました**

◎詳しい報告は、本文４ページ～をご覧ください。

＜子ども・子育て市民委員会ホームページ＞
https://www.kodomokosodate.jp

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# さぁ、言おう

2023年6月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道
**覚悟を持とう**
清水 肇子

4 報告 子ども・子育て市民委員会 **シンポジウム第2弾を開催**

11 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から
**事業を活用し「暮らサポ」3か所を立ち上げ 協働と交流を進めて生活支援へ**
暮らしのサポートセンター（徳島県鳴門市）

19 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう
**子どもの「やってみたい！」を大切に 禁止がない遊び場で「ともあそび」**
川崎市子ども夢パーク

23 **「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告**

28 連載 29 老いの暮らしを創る
**今回も、満点！** 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

30 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 10
**地域社会へのソフトランディング** お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて
34 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介
35 活動日記（抄）

32さわやか書棚／42みんなの広場 / 投稿募集
44さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 吉永 みち子

新しいふれあい社会　実現への道

# 覚悟を持とう

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

「住民向けの支え合いの講座をしても、なかなか担い手が集まらないんです」

自治体の担当者と車で移動していると、時々こんな話が出てくる。「今の高齢者は元気な人はまだ仕事をしていたり、趣味の活動に忙しかったりで、助け合いの活動を広げるのはなかなか難しいです」と、率直に悩みを吐露してくれる。全国の多くの生活支援コーディネーターや自治体の担当者が感じる苦労だろう。

確かに、住民に地域でお互いに助け合う活動をしようと呼びかけても、そう簡単に人が集まってきてくれる訳ではない。

「なんでそんなことを住民に言うのか、行政の仕事を押しつけるな」と怒鳴られてしまうことすらあると言う。そうした裏話も聞きながら、具体的なアドバイスもしつつ、そんな時、併せて伝えてさせてもらうのは、助け合いの生活支援がこれからの時代に必ず必要だと自分自身がまず思えているかどうかということ。すぐに成果が出なくても当たり前、「だからこそ、変わらない気持ちが一番の鍵」と、応援を込めて強く念押しすることにし

ている。言い換えれば、まったく新しい社会づくりを進める中での本気度が試されている訳で、自治体の覚悟といえるだろう。

認知症の人が増え、少子高齢化がますます進むことが自明の日本で、公助の限界を自助に強く求めるのは当然に無理がある。健康寿命の増進や介護予防に努め、法人も多様なサービスを増やして支えることは不可欠のことだが、互助というもう一つの柱を仕組みとして根付かせない限り、社会のひずみはさらにどんどん進んでいく。日々の生活に支援が何らか必要になった人、市場サービスを使い続けるゆとりのない高齢者などもどんどん切り捨てられていってしまう。自治体はぜひ将来への布石として、じっくり腰を据えて地域の助け合い活動支援に取り組んでもらいたい。

ただし、住民の活動を単なる担い手づくりと捉えている限り失敗する。住民の参加は財政削減のためではなく、利用者と支え手がどちらも満足感やいきがいを得られるようにすることに意味があり、成果につながる。住民主体で進めるためには時間がかかり、尊厳ある暮らしを支えるには専門職のサービスだけでは不足する。住民の参加以外に解決に向かう方法がないという強い姿勢こそがまず今問われている。

新たな挑戦をするとき、何であれ成功させるには必ず覚悟がいる。困難なことを受け止める覚悟の差が前に向かう推進力の差となり、新しい工夫を生み出し、次への展望も開けていくのだろう。

市町村は、どう対応するのか？　そして私たち一人ひとりは何ができるのか。改めて考えていこう。

## 子ども・子育て市民委員会

# シンポジウム第2弾を開催

4月24日、子ども・子育て市民委員会は昨年11月の発足シンポジウムに続き、第2弾シンポジウムを東京・永田町にある砂防会館にて開催しました。統一地方選挙後半戦の翌日開催の中、与野党国会議員もパネリストとして駆けつけてくれ、参加申し込みは会場参加120名、オンライン参加180名となりました。

昨年の発足シンポジウムでは、全体テーマを「妊娠→出産→子育て　切れ目のない総合的な給付保障制度を　安心して子どもを生み育てられる社会をみんなでつくろう」とし、以下4つのグループ・内容で議論を行いました。①中高生の子どもたちによる「どの子もいきいきと育つために自分たちはどんな政策を望み、そのための財源はどうあるべきか」、②子育て支援のNPOや当事者による「安心して子どもを生み育てるために必要な仕組みは何か」、③労働界・経済界代表者による「自分たちが子育てに果たす役割とは」、④国会議員・自治体首長ら政治家による「子育て政策・財源について」。

今回第2弾は「子どもを生み育てやすい社会の条件整備を」を全体テーマに、3部構成としました。最初に基調講演として、年明け早々に岸田文雄首相が打ち出した「異次元の少子化対策」を具体化するために設置された「こども政策の強化に関する関係府省会議」の座長として、3月末にたたき台を取りまとめた小倉將信こども政策担当大臣（こども家庭

庁担当大臣）から、そのたたき台「こども・子育て政策の強化について（試案）」を基に、「こども・子育て政策の基本理念」の解説および「こども・子育て支援加速化プラン（今後3年間）」について、集中的に取り組んでいきたい施策内容の説明をいただきました。

説明の中では、去る3月28日の上記関係府省会議第5回に招かれた当市民委員会・鎌田實共同代表による「社会全体の意識改革が必要だ」との発言にも触れ、当市民委員会とも手を携えて意識改革の国民運動を進めていきたい、との発信もありました。

子どもを持つ喜びは何ものにも代え難いという声は多数あり、だからこそ子どもと向き合う喜びを最大限に感じられる社会をつくることが大きな理念だとし、たたき台で示されている4原則「こどもを産み、育てることを経済的理由であきらめない」「身近な場所でサポートを受けながらこどもを育てることができる」「どのような状況でもこどもが健やかに育つという安心感を持てる」「こどもを育てながら人生の幅を狭めず、夢を追いかけられる」についても、3年間の加速化プランを終えた後にしっかり効果を検証し、さらなる充実に努めていきたい。そのためにも、6月に出される「骨太の方針（経済財政運営と改革の基本方針）」では、こども予算の将来的な倍増に向けた大枠を含め、道筋を示していきたい旨お話しいただきました。

小倉大臣による基調講演

## シンポジウム Part 1

続くシンポジウムPart1では、自民党の橋本岳衆議院議員、公明党の山本かなえ参議院議員、立憲民主党の岡本あき子衆議院議員をパネリストに迎え、鎌田共同代表の進行により、「子どもを生み育

てやすい社会構造の変革と財源問題　妊娠・出産・子育てを社会全体で支えるための財源調達の手だては…」をテーマに、優先的に取り組むべき政策課題および必要となる財源をいかに確保すべきかについて議論を行いました。

冒頭、鎌田共同代表から、前回の発足シンポジウムでは子どもたちが「子ども・子育て支援を充実してほしい。ただし、国債に頼ることにより将来的に自分たちに借金を負わせないでほしい」と口々に意見表明したことが紹介されました。

その上で、橋本議員からは財源捻出の選択肢として考えられるのは、歳出改革、税や社会保険料の負担増、国債発行など大きくは3つか4つ。数兆円単位で予算が要る話のため誰かに負担が偏ってしまうことのないよう、可能な限り広く負担していく方法を考えることが必要で、どれがいいかという話ではなく組み合わせていくしかない。また、これまでと現在、あるいはこれから親になる世代の働き方や環境は違っているということをみんなで共有すべきで、例えば学生結婚して子どもを育てようとしている家庭があれば、しっかり応援していく。子育ては各家庭の話ではなく、自分たち皆に関係する大事なことで、若い人たちを支える温かい空気の醸成と、社会で子育てをするという意識が必要であるとの考え

シンポジウムPart１の様子。左から、鎌田共同代表、橋本議員、山本議員、岡本議員

が示されました。

山本議員からは、「男は仕事、女は家庭」が、共働きが増え「男は仕事、女は仕事も家庭も」という状況に変化しているにもかかわらず、「育児＝女性の役割」という考え方が依然として根強い。子ども・子育てを社会全体で支えていくという意識改革をしていくことが先決であり、3月28日に党が出した緊急事態宣言の中でも、多様な人の意識を合わせる国民運動の必要性を提言した。先ほど大臣が説明された基本理念でも「共働き・共育ての推進」等が打ち出され前進はしているが、意識合わせの部分が非常に重要だと思う。そして、ちょっと困ったときに手伝ってくれるような子育て応援団を増やしていかねばならない。財源については、党として安易な国債発行には反対の立場であり、6月の骨太の方針で「本気度は本気でなかったのか」と言われないようしっかり頑張っていきたい、と決意が語られました。

岡本議員からは、優先事項として若い世代の所得を上げることと住まいの確保に加え、大学や専門学校の学費負担を下げるべきとの考えが示されました。さらに医療費についても、自治体間で格差が出ないよう子どもの健康に対しては国が責任を持ってほしいし、給食費の無償化と併せて食の安全・安心のために地産地消・国産国消を促進し、農業の活性化も図っていきたい。また、橋本議員の話を受け、諸外国のように日本の大学にも保育園が必要ではなかろうかとの意見も出されました。財源問題については、所得税や金融所得課税の累進強化にまずは着手し、可処分所得を増やす策との組み合わせで考えていかなければ理解を得られないし、法人税改革も事業主の協力が必要だとの意見と、今は自治体のほうが先んじて対策を講じているが、国がそこをしっかり支えたり、汲み取っていくべきだとお話しいただきました。

各議員からの発言を受け進行役の鎌田共同代表から、子どもたちが「生まれてきてよかった」と思えるようにするためにも、政治の役割は大事である。とはいえ政治を動かしているのは国民であり、「ど

うしたらこの国は良くなっていくのか」を皆が一緒に考え、財源については未来への投資であることを理解してもらいたい、とのまとめがありました。

## ●シンポジウム Part2

シンポジウムPart2は、パネリストとして株式会社ぴんぴんころり代表取締役で「東京かあさん」を運営している小日向えりさん、NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長、認定NPO法人びーのびーの理事長の奥山千鶴子さん（前出の関係府省会議第3回に有識者として参加、また4月に発足した「こども未来戦略会議」有識者構成員を務める）、株式会社コスモスモア管理部総務人事課課長の松井伸城さん、大分県臼杵市の中野五郎市長の4名に登壇いただき、オブザーバーを山崎史郎内閣官房参与にお願いし、「子育て支援政策は社会構造の変化がカギ　子どもを生み育てやすい社会の条件整備で社会構造を変えるには」と題して、板東久美子共同代表が進行役を務めました。

小日向さんからは、高齢者に生涯現役でいつまでも元気でいてほしいという思いから起業し、家事・育児、人生相談、子育ての悩み相談、ペットの世話まで、平均年齢66歳の地域の方（第2のお母さん）たちが、子育て家族を丸ごとサポートする東京かあさんの事業内容について紹介いただきました。

奥山さんからは、子育て中に自身が子育てしやすい地域づくりをしたいと、仲間と自主的に始めた親子の交流の場（現・びーのびーの）が全国に広がり、それを国が事業化してくれた。そこで活動を全国組織化してきた経験から、孤立させない安心を届ける子育て支援として、①出産前後の学びや交流の場、支援サービスを多様に用意、②0歳から就園前の家庭への支援強化、③ウェルビーイングを高める寄り添い型支援の構築、④中高生・若者による保育・子育て体験の促進、⑤子どもの成育環境・子育て世代の住居支援の5つが、本気で子育てしやすい社会構造につながるとの提言をいただきました。

松井さんからは、ワーク・ライフ・バランスの取れた働き方ができる会社が求められ、また、育児・介護休業法改正という社会の流れの中、同社における育休取得率が女性１００％に対し男性は30％という状況を打開すべく、チーム横断でプロジェクトチームをつくり、昨年10月から導入した制度、①子育て休業応援手当＝育休取得者の仕事を引き継ぐ社員への応援手当として、月に最大10万円を支給する制度（複数人への配分可）、②配偶者出産時の特別休暇（有給）拡大＝2日間から1か月へ、③育休に関するｅラーニング研修の実施と効果、について説明をいただきました。

中野市長からは、臼杵市で取り組む子どもにやさしく、子育ての喜びを実感できるまちづくりのために相乗効果を発揮する施策の展開として、平成28年から母子保健と子育て支援を一体化した子ども子育て課を新設し、妊娠期から18歳までの切れ目ない支援の実施、０歳から5歳までの保育料無償化、妊産婦から中学生までの医療費無償化、学校給食に市内で収穫された有機農産物を取り入れ、子どもたちの健やかな成長に配慮する施策等の紹介がありました。

さらに、市の医師会と連携した独自の奨学金制度等、健康・福祉・教育に注力している結果、移住施策の促進との相乗効果もあり、子どもの数が増加しているとの説明をいただきました。

シンポジウムPart２の様子。
左から、山崎さん、板東共同代表、小日向さん、奥山さん、松井さん、中野市長

続くディスカッションでは、子どもにも子育て家庭にも、シニアや学生など地域の多様な人が関わることの重要性、地域とつながりをつくれる人材・コーディネートできる人材への人件費問題、企業の良い取り組みは社会的に共有し広めていくことがその企業にとっても社会にとってもプラスになる、等の意見が出されました。

山崎さんからは、介護保険は被保険者がいずれ自分も支えられるという期待感があるが、子ども・子育てについては自分に見返りがないと考える人も少なくない。だからといって、次の世代に無責任な態度を取るようなことはすべきでなく、本当に高い次元の支え合いだからこそ、みんなで諦めずに訴えていきたい、とのコメントがありました。

進行役の板東共同代表が、今日は政策全体の中で子ども・家庭を支える、働く場の中で支え合う、あるいは社会全体で支え合うための具体的な姿がいろいろな形として見えた気がするが、そのためのファイナルチェンジ、マインドチェンジが今まさに必要である、とまとめました。

最後に、福岡県古賀市長の田辺一城共同代表が閉会あいさつを行いました。子ども・子育ては未来への投資だという国民理解が広がっていかなければさまざまな支援策の充実はなく、当市民委員会もみんなでこの問題を考えようと本日のシンポジウムを開催した。夫婦間の家事・育児分担についてはジェンダー平等社会にしなければならない。また、地域によって子ども・子育て支援サービスにばらつきが出ないよう、国がナショナルミニマムとして財源保障してほしい。そのためにも6月の骨太の方針に向け、本日の議論が有意義なものになってくれると思うし、こうした動きを国民運動にし、持続可能な国家・社会をみんなでつくっていきたいとまとめました。

（上田）

子ども・子育て市民委員会ホームページ https://www.kodomokosodate.jp

# 事業を活用し「暮らサポ」3か所を立ち上げ 協働と交流を進めて生活支援へ

## 暮らしのサポートセンター（徳島県鳴門市）

徳島県の北東端に位置する人口約5万5000人の鳴門市。高齢化率は35％を超え、一人暮らしや高齢者のみの世帯も年々増加する中で、住民主体の助け合いがある地域づくりに向けた同市の生活支援体制整備事業の取り組みは、当財団情報紙『さぁ、やろう』vol・5（2018年4月発行）でも紹介しました。その後、第2層協議体が編成された市内3か所で、他地域も参考としながら、共生型常設型居場所と生活支援の有償ボランティアの活動拠点機能を兼ね備えた「鳴門市版暮らしのサポートセンター（暮らサポ）」を開設。それぞれの地域の特色を生かした活動を展開しています。

（取材・文／城石　眞紀子）

### その1　暮らしのサポートセンター　みんなの家Asa居（あさい）

**自然につながり合う中で互いを気にかける関係へ**

鳴門市内で最初に立ち上がった大津町の暮らサポ「みんなの家Asa居」は、空き家を活用して2018年10月1日にオープン。市の中心部からも近い住宅街にある木造2階建ての一軒家は、アットホームな雰囲気だ。

みんなの家 Asa 居の外観

「17年5月に市が開催した住民フォーラムに参加したのをきっかけに、住民勉強会に参加したメンバーらが中心となって、翌年、大津・木津地区第2層協議体を編成しました。さらにその中で話し合いを重ね、『みんなで集まれる場所が欲しい』という意見が出たことから、Asa居を立ち上げました」と話してくれたのは、代表の島田茂仁(しげひと)さん（71歳）。

開所日は月・水・金曜日の9時半～12時。地域に住む高齢者が気軽に立ち寄っておしゃべりをしたり、日によって、いきいき百歳体操や太極拳で体を動かしたり、脳トレや短歌教室、手芸等の趣味を楽しむ企画もあるなど、過ごし方は自由。利用者は1日15人ほど。「ここはみんなが仲良しだから、居心地がいいんです」という利用者の皆さん。

月に3回は昼食も1食350円で提供（予約制）。「みんなでメニューを決め、野菜は家庭菜園でできたものを持ち寄って旬を生かした献立を工夫。『おいしい』と言ってもらえるので励みになります」と調理を担う女性グループ。広い庭や玄関先の花壇の手入れも運営スタッフと利用者で行い、きれいに整備。みんなの家を「もうひとつのわが家」のように大切にしていることがうかがわれる。

「コロナ禍で通算4か月ほど休止しましたが、アラートの度合いによって状況を見ながら活動を継続してきました。この間、利用を控えていた人のことを気にかけて、編み物が得意なメンバーがニット帽を編んで届けたり、LINEグループをつくって連絡を取り合うなど、お互いを気にかける関係づくりができています」

## 小学生との交流学習をきっかけに地域とのつながりも広がる

島田さんは学校運営協議会のメンバーにもなっていて、近くにある鳴門市第一小学校との交流も進んでいる。

「19年に、総合的な学習の一環『まちなかたんけん』で、みんなが幸せな町はどんな町で、町のやさしいところを知るために、4年生がAsa居を訪問。暮らサポではどんなことをしているのか、子どもたちの疑問に答えるなどして交流を深めました。それをきっかけに、夏休みには子どもたちが食事に来たり、私たちがマスクケース395枚を作って小学校に贈呈したり、下校時の見守りなどの交流が続いています」

地域の主任児童委員と共に制服・体

左から島田さん、副代表の四宮正造さん、短歌教室を主宰する鍋島治秀さん

「まちなかたんけん」での小学生来訪の様子

操服のお譲り会をしたり、「まちなか絵本図書館」を開設して開所中は自由に出入りしてもらうほか、子ども食堂の開催場所にもなっているなど、地域とのつながりも広がっている。

「生活支援については月1回、地域包括支援センターの方が来てくれて、介護相談の日を設けています。助け合いでできることはさせてもらうと案内しているので、包括からちょこちょこと支援の依頼が入ってきています。定期的な支援としては、日常のごみ出し、PTAによる資源ごみ回収への協力、室内の掃除。あとは草刈りや草引きなど。担い手不足が課題ですが、できる人ができることをすればいい。私自身もできるうちは役に立ちたいと思っています」

つながり、広がり、助け合う。Asa居ではそんな輪が大きくなってきている。

## その2 暮らしのサポートセンター 縁どころ

### お遍路さんの接待どころが助け合いの拠点に

四国遍路八十八ケ所霊場の第一番札所近くにある大麻町（おおあさちょう）の暮らサポ「縁どころ」は、古民家を活用して18年11月16日にオープン。

「ここは、20年ほど前からお遍路さんの接待どころ（休憩所）として、地元の人たちが活動していた地域の居場所でした。そんなことから、生活支援コーディネーター（SC）の方から『一緒に活動しませんか？』とお声がけいただき、大麻町板東地区第2層協議体を編成。暮らサポとしての機能も併せ持つことにしました」というのは、代表の手塚任（たかし）さん（86歳）。

福祉施設の理事長を務める手塚さん

幼稚園のオリエンテーリングの様子

縁どころの外観

運営スタッフの皆さん。左から、福永育史さん、副代表の楠博孝さん、手塚さん、野口典子さん、石川さん

をはじめ、運営スタッフも民生委員など地域に長年貢献してきた人たちばかりで、住民の信頼が厚く人脈も豊富で、地縁のつながりが強いので生活や家族の状況にも精通。正に、助け合いの拠点としてはうってつけの場となっている。

開所日は火・木・土曜日の13～16時。いきいき百歳体操や脳トレ教室の開催、茶話会や手芸など趣味を生かした交流を行っている。利用者は1日あたり8人程度。古民家の奥に住む家主の近藤久子さん（87歳）も一緒に活動を楽しんでいる。

「夫を亡くして一人で暮らしていますが、わざわざ出かけなくても週3回みんなが来てくれるのでにぎやかいろいろおしゃべりもできてありがたいですわ」

また、副代表で元幼稚園教諭の石川久恵さんの働きかけで、近くの板東幼稚園のオリエンテーリングのポイント箇所の一つとして親子120人が縁どころを来訪するなど、ここでも地域との交流が進んでいる。

「昨年11月には、Asa居に続いて『まちなか絵本図書館』を開設したので、親子連れでの利用も含め、小学校や幼稚園・保育所等への周知を積極的に図っていきたいと考えています」

## コロナ禍で休止していた買い物支援が再スタート 地縁を生かし人と資源をつなぐ

生活支援では、地域の課題であった買い物支援が動き出している。

「この地域は、スーパーが1軒もない買い物困難地域なんです。そのため、地域の社会福祉法人の協力を得て、車

の運転ができないなど買い物にお困りの方とその社会福祉法人施設の利用者さんが一緒に買い物に行き、買い物後は交流を楽しんだりもしたのですが、3回実施したところでコロナ禍により休止に。何とかできないものかと考えていたら、市社会福祉協議会が10人乗りのワゴン車を購入したという情報を得まして。だったら、その車を使わせてもらおうと交渉し、ボランティアで運転してくれる人も見つかったので、この4月から老人会のグループ単位での月1回の買い物支援ツアーを始めました」

買い物後にはみんなでお昼を食べ、好きな場所に立ち寄るなど、行き先を自由に組み立てできるのがいいところ。運転ボランティアの人も楽しんで活動してくれているそうだ。

「今のところ利用は1グループだけですが、他の老人会からも申し出があれば、アレンジするつもりです。また、コロナも落ち着いてきたので、社会福祉法人施設との協働での買い物支援も再開してもらえるように働きかけ、今後はこの2本柱で買い物支援を実施していければと考えています。その他の生活支援についても、困ったことがあったらいつでも相談に来てください、とアナウンスしています」

社会福祉法人の協力を得た買い物支援

このように、地縁が強い地域の特性を生かし、人と資源をつないで活動を創出してきた縁どころ。

「負担にならない程度にみんなで楽しく活動し、たまに人助けができたらいいかな」とも語る手塚さん。肩の力を抜いて取り組むことも、持続可能な地域づくりの秘訣なのかもしれない。

## その3 暮らしのサポートセンター むや

### 食を通じてつながり合う みんなの食堂が大人気

市の中心部にある撫養町（むやちょう）の商店街の空き店舗を活用して、18年11月23日にオープンした暮らサポ「むや」。ここは、この地区の自治振興会長や「新池川をきれいにする会」会長、さらには民生委員も務めるなど、地域のキーパ

ーソンである代表の乾（いぬい）肇（はじめ）さん（78歳）が旗振り役となって立ち上がった。

「第1層協議体の集まりに参加し、こういう居場所があればいいなと思いましたが、自分一人ではできない。それで仲間に声をかけて撫養町川西地区第2層協議体を編成し、賛同してくれた人たちと一緒にむやを開設しました」

開所日は月～金曜日の9時半～12時半。利用者は1日あたり8人程度。ここもいきいき百歳体操の会場となっているほか、手芸教室や折り紙教室、オカリナ教室など、したいことを、したい人たちが集まって教えながら楽しんでいて、小さなカルチャーセンターのようになっている。

毎週木曜日には1食350円で昼食も提供。コロナ禍以降は予約制にしているが、食堂感覚で誰でも利用できるため、昼時には満席になる人気ぶり。

「最近は、毎回30食以上提供しています。商店街の真ん中なので気軽に立ち寄ってほしいと思ってここを始めましたが、シャッター街ということもあり、なかなか利用者が増えませんでした。でも最近は、あそこに行けばお昼が食べられるということで、いろんな人が出入りしてくれるように。一人暮らしの方も3分の1くらいを占

むやの外観

田村さん（左）と乾さん（右）

おいしいと評判の昼食。
まちの食堂のような雰囲気でにぎわう

めていてとても喜ばれているので、これをきっかけに、困りごとがあったら気軽に相談してくれるようになればいいなと思っています」

調理を手伝うスタッフの中には、引退したSCや元市社協職員もいる。「自分自身の介護予防にもなるし、皆さんに『おいしい』と言ってもらえるのがやりがいになっています」という元SCの佐藤久美さんは、第2の人生の地域デビューをここで果たし、いきいきと活動している姿を見せてくれた。

## 活動してみて実感した助け合いの良さ

「もう一つの柱、生活支援は担い手が不足する中、少しずつ始めていますがまだまだです」

これまでに、自宅の清掃やごみ出し、草抜きなどの支援を行っていて、包括や居宅介護支援事業所とも連携して活動。近所の人のごみ出しを手伝っている副代表の田村豊さんは、「足が悪くて、基本的に外に出られない方なのですが、行くたびに『本当に助かっています』と言ってくれるので、こちらもうれしくなります。見守りにもつながるし、こんなふうに地域に住んでいる人が困っている人を日頃からちょっと気にかける関係性ができるのが、助け合いのいいところだと実感しています」と話してくれた。

むやがもうすぐ開設5周年となることから、この6月には商店街で行われるイベント「100円商店街」にも参加。たい焼きやフランクフルト、クリームソーダを100円で提供し、手芸教室の方たちも作品を出品する予定だそう。

「商店街の活性化にもつながるし、地域の人たちにこの場所を知ってもらう良い機会になりますからね。ここでも最近、『まちなか絵本図書館』を開設したので子どもたちにも利用してほしいし、たくさんの人にフルに使ってもらいたいというのが願い。そうした中から助け合いも広がっていけばと思っています」

＊　＊　＊

## 地域に寄り添い、地域とともに

鳴門市では、行政がこうした暮らサポの活動を全面的にバックアップしている。

「鳴門市の一番の特徴は、生活支援体制整備事業を始めるにあたって、市も積極的に支援して地域の皆さんと協働したいと考え、SCを市の職員として雇用し配置したことです。そうして、地域と市社協、地域と行政などをつなぐ役割として信任を受けて事業をスタートさせ、勉強会等を通じて『やりたい』という機運の醸成を図り、並行してそれをSCが側面支援して活動創出につなげる体制づくりをしてきまし

た」と語るのは、同市健康福祉部長寿介護課長の川柴慎太郎さん。

例えば、立ち上げの際に第2層協議体のメンバー候補の人たちと話し合いを重ね、暮らサポの拠点となる場所探しを担ったのも3人のSC。現在は1人体制だが、SCの端村範子（はしむら）さんは継続的に各暮らサポに週1～2回は顔を出し、人も活動状況も詳しく把握していて住民からの信頼も厚い。

「第2層から上がってきた『こんなことをやりたい！』ということを実現できるよう、バックアップすることを心がけています。こちらがやりすぎると押しつけになってしまうので、さりげなく（笑）。また、ときには3か所の暮らサポの代表者に集まってもらうこともあります。情報交換の場を設けることで互いに刺激になればと思うし、『あそこでやっていることをうちでもやりたい』となれば、そのお手伝いもします。まちなか絵本図書館の開設なども、そうして広がっていきました」（端村さん）

川柴さん（左）と端村さん（右）

暮らサポと学校とのつながりにも尽力するなど、その真摯なサポートぶりは取材を通しても伝わってきて、住民が活動をさらに広げていけるよう奔走している姿が垣間見られた。

「市では生活支援サポーター養成講座を開設するなど、担い手の掘り起こしなどにも力を入れていますが、まずはコロナ禍で弱まってしまった既存の暮らサポの活動の一層の強化や周知を図りつつ、各種団体とも連携し、それをベースに、さらに助け合いを広げていければと考えています」（川柴さん）

地域住民と協働する鳴門市の取り組みを、ぜひ各地域でも参考にしていただきたい。

## 暮らしのサポートセンター

鳴門市内にある住民同士の助け合い活動の拠点。誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指し、高齢者等の居場所づくり、介護予防、生活支援サポートなどを行っている。年会費1000円。生活支援のサポートは有償ボランティアで、ゴミ出しや草抜き、掃除、洗濯、買い物支援などの日常の困りごとをサポート。利用料金は1時間700円で、うち600円が支援したサポーターへの謝金となり、100円は事務経費として活動資金に充てている。

●連絡先／〒772-8501
徳島県鳴門市撫養町南浜字東浜170
鳴門市役所健康福祉部長寿介護課
電話　088-684-1241

いきいき わくわく

# 子どもと一緒に地域で輝こう

## 子どもの「やってみたい！」を大切に禁止がない遊び場で「ともあそび」

### 川崎市子ども夢パーク

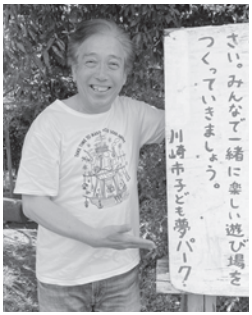
**２００３年、神奈川県川崎市に市民参画でつくられ、今年で活動開始20周年を迎える「川崎市子ども夢パーク（以下、夢パーク）」。「地域のシニアが理解者となり、子どもたちの『やってみたい！』を大事にしながら一緒に遊んでいます」という総合アドバイザーの西野博之さんに、夢パークの活動について聞きました。**

（取材・文／長島　ともこ）

### ●子どもと大人が一緒につくった居場所

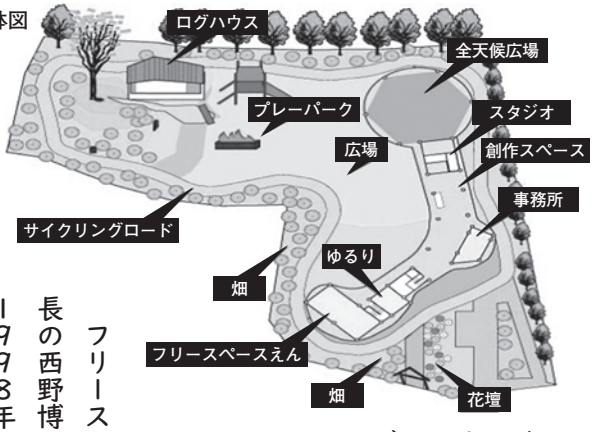
ＪＲ南武線津田山駅から徒歩で約５分。「ようこそ川崎市子ども夢パークへ」と描かれた手作りのゲートをくぐり抜けると、工場跡地を利用した約１万㎡の広大な敷地には、土や水、火や木材など自然の素材や工具で自由に遊べるプレーパークエリア、音楽スタジオ、乳幼児親子が過ごす部屋、ゴロゴロして過ごせる部屋などのほか、学校に行っていない子どものための「フリースペースえん」も設置されている。

夢パークは、２０００年に制定された「川崎市子どもの権利に関する条例」を基に、市が施設を提供し、公益財団法人川




夢パーク総合アドバイザーの西野博之さん

1万㎡の夢パーク全体図




崎市生涯学習財団と認定NPO法人「フリースペースたまりば」が共同で運営する公設民営。地域の子どもと大人たちが一緒になってつくった「子どもの居場所」である。

フリースペースたまりば理事長の西野博之さん（63歳）は、1998年から川崎市子ども権利条例調査研究委員会の世話人として条例策定に携わり、06年から21年までの15年間夢パークの所長を務め、現在は総合アドバイザーだ。

「いつの間にか『子どもにけがさせちゃいけない』『失敗させちゃいけない』という大人が増えて、『危ないからやめなさい』と、子どもが何かに挑戦する自由を奪う社会になってきたように感じていました。子どもたちの声を聞いてつくった夢パークは、遊びを制限するような禁止事項は原則なし。自分が『やってみたい！』と思ったことに思い切り挑戦できる場です」と語る。

## ●餅つきを機に、地域のシニアがパークの理解者に

夢パーク開設に向け、「ブランコやウォータースライダーなど自分たちで遊ぶ遊具もすべて手作りにしよう」としたときに、まず活躍したのが地域のシニアだったという。

「建築のプロの方が、ボランティアで遊具作りのアドバイザーを買って出てくれたのです。子どもたちは、木材の切り方や組み立て方などを教えてもらいながら遊具を作れるようになりました。幼い頃、近所の空き地など何もないところで自分たちが工夫しながら思う存分遊んできたシニア世代だからこそ、彼らが培った経験や知識が大いに生かされました」（西野さん）

夢パークがオープンした当初、焚き火で煙が上がったり、子どもたちの遊びで砂ぼこりが立った

りすることで、近隣の住民から苦情が寄せられることもあったという。この混乱を乗り越えることができたのも、「地域シニアの皆さんのおかげです」と西野さんは言う。

「お正月、子どもたちと餅つきをしたかったのですが、臼や杵もないし、もち米の蒸し方も分からない。そこで、町会にお願いに行ったら婦人部等の方々が協力してくださって、手取り足取り教えてくれたのです。この交流を通して、地域の方々の誤解が徐々に解けていきました。『外から見たらどんな場所なのかよく分からず不安だったけれど、中に入ってみたら、私たちが小さい頃の遊び場そのもの。こんな場所がうちの町にできたのなら、守っていかなきゃ』と、夢パークの〝理解者〟に回ってくれたのです」

その後は、「子どもたちにベーゴマを教えたい」という人や、「乳幼児親子の部屋で読み聞かせをしたい」というシニアの読み聞かせグループ、敷地内の畑で子どもたちと作物を育てる自称〝ガーデン爺〟などが次々とボランティアとして出入りするように。

「子どもは、『面白い！』と思ったところには寄ってくるんですよね。シニアからいろんな遊びを教えてもらった子どもたちは、大喜び。シニアはその子どもたちの笑い声や歓声から、エネルギーをもらえるんです」

## ●子どもの感性に驚かされる

夢パーク開設当初から「木工ボランティア」として創作スペースで子どもたちと一緒に作品を作る福峯衆宝（しゅうほう）さん（69歳）はもともと建築士だが、ボリビアで識字教育を行うための「学び舎」を建設する活動を機に西野さんと知り合った。それがきっかけとなり、夢パークに足を運ぶようになっ

思いっ切りどろんこ遊び

木工ボランティアの福峯さん

たという。

「とにかく感性豊かな子ばかり。削った木をたくさんポケットに入れた子が、30分おきくらいに僕のところに来て『木って、匂いが変わるんだね！』と教えてくれたときは、その表現力に驚かされました。ここでは、木工作品は『作ってあげる』のではなく『作ろう』がコンセプトなのですが、お子さんが小さい場合は、僕が作品を作る過程を保護者の方と一緒に見てもらいながら、やすりで削るなど、ところどころ一緒に手を動かしています。すると、子どもは大喜びでね。『僕の（私の）宝物！』と言って大事にしてくれるんですよ。そんな姿を見るのはうれしいですね」と、福峯さん。

## ●完成形のない居場所 地域の声を聞き、つくり続ける

オープン後に隣にできた高齢者集合住宅の住民からも、「ハロウィンパーティで使えるように」とカボチャの種が送られたり、「パークの桑の葉で育ててね」とカイコを譲られたりするなど、地域シニアとつながり続ける夢パーク。

「夢パークは子どもたちがつくり続ける、つくりかえていく遊び場だから、〝完成形〟はないんです。夢パークの理念を基に設立当初からのボランティアで運営に関わる『支援委員会』。そこが中心となって、毎月開かれる利用者とスタッフの懇親会である『つくりつづける会』で地域の人たちの声を常に聞きながら、皆で一緒に楽しい居場所をつくり続けていきたいですね」

核家族化、地域のつながりの希薄化などにより、子どもとシニアのふれあいが少なくなってしまった現代。子どもとシニアが共に遊ぶことで、子どもは笑顔になり、シニアも元気になる。だからこそ、夢パークのような場が大切なのだ。

〈川崎市子ども夢パークHP〉https://www.yumepark.net
◆ 夢パークを舞台にしたドキュメンタリー映画「ゆめパのじかん」が全国で自主上映中。
〈映画特設サイト〉http://yumepa-no-jikan.com/

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。おかげ様で、5月で設立から3年となりました。今月号は、頼り頼られる地域を目指す家事支援と送迎の活動、孤立しがちなお母さんたちへの訪問傾聴と居場所の活動、地域住民自らが課題解決に動き出した生活支援と外出支援を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

東京都武蔵村山市

### 「誰でも誰かを頼っていい！」地域へSC・協議体と協働して活動開始

三ツ藤木の葉の会

**助成金額　15万円**

地域の高齢化、孤立問題、核家族社会の中、つながることの大切さと助け合いが必要と考えた三ツ藤木の葉の会は、地区の第2層協議体で三ツ藤地域にニーズ調査を全戸配布で実施。協議体分科会として月1回、第1層・第2層SCと一緒に検討会を行った後、利用会員36名、協力会員14名（昨年4月現在）をマッチングし、家事支援を開始しました。また、地域のデイサービスから地域貢献として車両と運転手を提供してもらい、病院や公的施設への送迎も始めました。家事支援30分300円、送迎1回300円のチケ

ット制として、利用する人の無用な気遣いをなくす形としています。1年間で、家事支援（草取り、時計修理、買い物等）24件、送迎は103件となりました。

助成金は、必要文具、プリンター、物置等の購入に充てていただきました。物置は外での作業道具収納場所として、協力会員が誰でも取り出せるようにしています。

子育て支援も掲げる木の葉の会ですが、若い世代との交流や次世代の協力者、担い手の育成が課題、とのこと。またコロナ禍を受け、電話やLINEでの「お元気ですか?」コールも進めたいそうです。

「『誰でも誰かの役に立てる!』『誰でも誰かを頼っていい!』こんな合言葉が通じるご近所付き合いができる地域にしたい!」と熱い抱負を寄せてくださいました。

三ツ藤木の葉の会の皆さん

大阪府藤井寺市

## 母親への訪問傾聴、居場所開催 利用者が後に支援者となる循環型ボランティア組織を目指す

**訪問型子育て支援団体リーフ**

**助成金額　15万円**

訪問型子育て支援団体リーフは、設立前の2年間、メンバーがお母さん向けの講座や座談会を開催していましたが、コロナ禍となり「家から出るのが怖いが、誰かに話を聴いてほしい」「友人も同じように大変だと思うと、電話などがしづらく誰に相談していいか分からなくなった」という声を聞く機会が増えました。そこで、訪問支援に必要なスキルを得るため、研修や傾聴講座を開始。また、LINEでつながっているお母さんに向けて、LINE上で子育て相談や情報提供を行うなど、オンラインでできることも開始しました。

助成金は、研修・講座費用、チラシ作成費用、通信費、座談会（ママカフェ）の会場費等に活用されました。

リーフの理念に賛同し、研修・講座を受けた人たちは現

在、訪問傾聴ボランティアとして活動の中心を担っています。ママカフェには親子やお母さんが集まり、「こんなときどうする?」といった話題を出すことで、ホッとできる居場所として定着しつつあるそうです。

市内の子ども子育て連絡会にも加入し、他団体とも交流しているリーフ。社会や地域から孤立しがちなお母さんに傾聴訪問が行き届くようにと、今後も定期的に研修・講座を実施して「支援を受けた人が後に支援していく循環型ボランティア組織をつくる」という活動理念実現のために、力強く取り組みを進めています。

ママカフェの様子

長崎県佐世保市

## 生活支援と外出支援を一体的に提供 地域住民が自ら課題解決に立ち向かう

よしいこ会

助成金額　15万円

よしいこ会は高齢者などを対象に、見守り、買い物代行、薬受け取り、ごみの分別・ごみ出し、庭の草取り・剪定、書類の説明・作成提出代行、入院中の家事などの日常生活支援、それ

外出支援の様子

と同時に外出支援も一体的に行う目的で、昨年活動をスタート。地域担当の第2層SCも立ち上げをバックアップしました。

よしいこ会の地域は交通の便が非常に悪く、「バスの乗降や待ち時間の長さに苦労する」「タクシーを降りてから用事を済ませたり、買った物を家の中まで持っていくのに苦労する」といった声が多く寄せられたことが、活動開始のきっかけになりました。

助成金は、外出支援のための講習費用、備品費、マッチング調整費など立ち上げに必要な資金として活用していただきました。今後は、いずれ訪問型サービスBの補助を受けて活動を継続していきたいと考えているそうです。

チラシ配布や口コミで利用が増え、大変喜ばれているというよしいこ会の活動。今後も活動を継続・充実させていくことで、暮らしやすい地域になっていくよう努めていく、とのこと。「行政の施策を待つだけでなく、地域住民自ら課題解決に立ち向かっていかなければなりません」「この活動は地域住民を支える素晴らしい活動。また、活動する自らの生きがいにもなる」というよしいこ会の意気込みに、今後も大いに期待したいと思います。

# 「地域助け合い基金」状況のご報告

## ●基金設立から3年を迎えて

2020年春以降の新型コロナウイルスの感染拡大を受け、当財団では同年4月、全国の助け合い活動の状況を把握するために緊急アンケートを実施しました。その結果、全国の助け合い活動団体では活動をやめざるを得ず、地域でのつながりが途切れ、行き場を失い、フレイルや認知症の進行といった深刻な状況にある人たちがたくさんいることが分かりました。一方で、困難な状況でも何とかつながりを維持し、活動を継続しようとする団

体も多く見られました。

アンケート結果を受けて当財団では、助け合い活動を何とか支援したいと考え、同年5月に「地域助け合い基金」を設立しました。その後、地域共生社会の実現につながる活動全般に支援対象を広げ、今日に至ります。設立以降、皆様のご寄付を原資に、下記の通り大変多くの助成を実行させていただくことができました。これまでのご支援・ご寄付に心より感謝申し上げます。

助成先の特徴として、法人格を持たずに地域に根差して活動している団体や個人で活動しているところが多いことや、SCの協力や推薦で申し込まれたケースが多いという点が挙げられます。地域もほぼ全国の都道府県に及んでおり、活動内容も多岐にわたります。

当財団は、今年度も本基金を継続いたします。基金は皆様のご寄付に支えられており、応援したい地域を指定して寄付することもできます。全国各地の助け合い活動にぜひご注目いただき、今後もご支援をよろしくお願い申し上げます。

（事務局長・内田）

（5月15日　当財団ホームページ開示時点）

**◎寄付受付額**

**218件　3187万3836円**

このほかに当財団より1億2000万円を供出

**◎助成実行額**

**927件　1億4682万8064円**

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

財団ホームページ内
基金関連ページ

クレジットカード
決済ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、ＱＲコードもご利用ください！

**基金に関するご意見・お問い合わせ**

＜地域助け合い基金担当＞
電話：(03) 5470-7751　FAX：(03) 5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

連載 29

# 老いの暮らしを創る

## 今回も、満点！

福祉ジャーナリスト　村田　幸子

歯のトラブルにはあまり悩まされたことがなかったのですが、急に奥歯が疼き出したのは30代の初め。親知らずが斜めに生え、横の歯に食い込んで痛みが出ていたのです。親知らずは普通、10代後半には生えてくると言われますが、私は30も過ぎてから生えてきました。それも4本、しっかりと。口の中はとても窮屈そうでした。

横向きに生えた性格の悪い私の親知らずの抜歯は大騒動でした。途中で何回もレントゲンを撮っては歯茎を切開する、その繰り返し。口の周りの感覚はなくなりました。抜歯後は痛みだけでなく口が開かず、指3本が縦に入るまで口を開ける練習をして下さいと言われ、3日間も寝込んでしまいました。

小さい頃虫歯で苦しんだことはありますが、成人してからの大きな歯のトラブルは、この時だけです。そして今、私は83歳。28本、すべて自分の歯です。自分の歯で何でも噛めることは食生活を豊かにします。大口開けて笑ってもいます。このように自慢げに言えるのは、親知らずの抜歯経験があったからこそ。抜歯後医師から、毎年定期検診を受けることを勧められ、以来ずっと守っています。定期検診では歯ブラシの持ち方、歯の磨き方、歯ブラシを歯に当てる角度など、鏡を手に持って自分で自分の口の中を見ながら、歯科衛生士さんから事細かに指導を受けました。毎年

のことなので「もうわかっているから大丈夫ですよ」と言っても「いいえ、いい加減になっていることがありますから」と、必ず鏡を持たせられました。「あら、きれいねえ。今年は私のやることないわ」と言われる時もありました。今は年2回の定期検診。そして物を食べた後には必ず歯磨きか口を漱ぐ事が習慣となりました。入れ歯やインプラントの友人たちが「食事の味がしない」とか「少し緩んできたので歯医者にいかなきゃ」なんて言うのを聞いていると、自分の歯で何でも美味しく食べられる幸せを感じています。

80歳で20本の歯を残そうという8020運動が、1989年から始まっていますが、2016年の歯科疾患実態調査によると、8020達成者は51・2%。2人に1人以上で、過去最高とのこと。ちなみに前回2011年の調査では40・2%でした。また現在、1人平均して何本歯が残っているかというと、80～84歳で男性は15・1本。女性で15・5本です。8020運動の成果とも言えるでしょうし、TV等での情報発信も格段に増えてきています。口の中の健康が全身の健康を増進させるということが広く認識され、その実感を持つ人が増えてきたことが大きいと思います。

昨年出された通称「骨太の方針2022」では、国民皆歯科健診について具体的な検討を行うということが明記されました。今後、どのように進められていくのかは定かではありませんが、いずれにしろ国をあげて、口腔ケアをすることによって健康づくりを進めようという機運が高まってきていることを感じます。

6月4日からの1週間は「歯と口の健康週間」。定期検診に出かけ「今回も満点！」という先生の言葉に、足どり軽く帰ってきました。

**（むらた　さちこ）**　立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生100年時代を生き抜く知恵 10
ジェンダーの視点から

# 地域社会へのソフトランディング

お茶の水女子大学名誉教授　袖井　孝子

（そでい　たかこ）
お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニティネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族　変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路　男の末路』（中央法規）、など多数。

仕事一筋で生きてきたサラリーマン男性に対して、定年後は地域社会にソフトランディングすることが勧められている。私自身、退職前のサラリーマンを対象とした講座で、エラソーにそんなことを喋っていた。その際には、地域社会の主役は自営業男性と専業主婦だから、せいぜい奥さんを大事にして、新しい生活に移行するのを助けてもらうようにと示唆したこともある。

ところが、実際に自分が定年を迎えてみると、地域社会とはまったく疎遠であることに気が付いて、愕然とした。考えてみると、現役時代は大学教師としての仕事に加えて、国や自治体の審議会や委員会の委員をいくつか引き受けて駆けずり回っていた。いつも足早に地下鉄かJRの駅に向かっていたので、地域社会とはほとんど無縁の生活だった。

女性でも仕事ばかりしてきた者は、猛烈サラリーマンと同様、地域社会に根っこがない。これではいけないと反省し、にわかに地域に目を向け、さまざまなことに挑戦してみることにした。私が

始めたのは、詩吟、囲碁、ラジオ体操、そして地区協議会の公募委員である。

詩吟は、自治体の広報紙でみつけて、まず夫が参加することになった。詩吟には何となく右翼っぽいイメージがあるので敬遠していたが、足の不自由な夫の付き添いで出かけるうちに、先生に勧められて吟じてみることにした。ほめ上手の先生におだてられるうちにだんだんはまって、何と10年継続。とうとうこの秋には師範の資格試験に挑戦することになった。

囲碁を始めたのは、地域にあるスポーツクラブで知り合った女性に勧められたのがきっかけである。ボケ防止に囲碁はいいかなと思ったのと、会場が家から徒歩10分くらいという近さなのが魅力だった。始めて数か月でコロナ禍になってしまい2年近くお休みしたが、昨年から再開した。まだまだ初歩の初歩だが、何とか続けている。

ラジオ体操を始めたのは、コロナ禍が契機だった。コロナのため、スポーツクラブが休会になったので、何か運動をしなくてはと近所を散歩しているうちに、靖国神社でラジオ体操をしているグループに遭遇した。1年365日、大晦日も元旦も休みなしという。早速、参加したが、数か月後に転倒骨折して、手術をすることになった。しかし、桜吹雪の下でのラジオ体操を目標にリハビリに励み、2年前の桜の季節に無事復帰を遂げることができた。

地区協議会の委員を募集していることを知ったのは、町内の掲示板だった。たまたま目に留まったので、電話したところ、即座に採用されてしまった。委員の大半はボランティア歴30年、40年のベテラン揃い。多くが地元の小学校のママ友であり、地域の情報をいろいろ教えてくれる。

そんなわけで、多彩なことに挑戦し、これまでの私の交際範囲にはまったくなかった人びととの交流を楽しんでいる。地域社会にソフトランディングするコツは、何でもやってみようの精神と新しいことを始める勇気といえるだろう。

# この国の「壁」

鎌田　實

**「乗り越えられない壁はないし、壊せない壁はない。**
**大切なのは、決してあきらめることなく、**
**常に顔を上げて壁に挑んでいくことである。」（「はじめに」より）**

著者・鎌田實さんは、「子ども・子育て市民委員会」の共同代表のお一人であり、当財団の取り組みにも賛同してくださっている方です。

鎌田　實　著
潮出版社　990円（本体900円）

雑誌での連載をまとめた本書では、人口減少、コロナ、孤独、死など、日本社会を覆う「壁」の突破法が著者の視点から短い節にまとめて語られ、第５章では、「子ども・子育て市民委員会」の取り組みについても触れられています。

今、周りにある壁を皆で破っていきませんか？

# 新しい
# ふれあい社会づくりに
# 向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介
- **さわやか**活動日記（抄）

# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2023年4月1日～4月30日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

## さわやかパートナー個人（69件）

（都道府県別50音順）

**北海道**
本間　正夫
**宮城県**
佐藤　かつよ
**福島県**
阿部　洋子
猪狩　則子
**茨城県**
佐藤　真智子
**埼玉県**
五十嵐　紀男
小関　和夫
佐伯　昌子
佐伯　美穂英
酒井　勝男
友國　洋
中村　清子
細井　親子
向所　ふみ代
森戸　伸行
**千葉県**
小澤　利政
鈴木　章
**東京都**
伊豆　幸美
稲川　寿子
大井　利雄
大島　勝喜
尾崎　雄
神永　光男
神谷　武秀
木村　智都子
木村　大哲
清水　敦子
鈴木　慶子
鷹野　義量
田河　慶太
戸田　信久
永島　崇子
長吉　多佳子
林　幹高
松尾　邦弘
宮部　敬子
吉岡　高志
和久井　良一
**神奈川県**
池谷　滿
岡本　淳
恩田　實
佐野　圭子
清野　行雄
角井　佑子
西島　康二
平野　潤一
**新潟県**
河田　珪子
**富山県**
棚田　美智代
**岐阜県**
榎本　豊
山下　紘一
**静岡県**
黒田　欽子
水野　光江
**愛知県**
大島　嗣雄
齋藤　みどり
菅　文夫
瀬川　正俊
**三重県**
西村　美紀子
藤田　清正
**京都府**
北村　哲也
**大阪府**
滝井　朋子
中田　壽子
中原　和之
**兵庫県**
桑山　信子
**岡山県**
谷　敬子
**広島県**
島本　幸子
**福岡県**
佐藤　須美子
**長崎県**
古賀　秀隆
**大分県**
髙木　佳奈枝
**宮崎県**
渡邊　ユミ

## さわやかパートナー法人（5件）

（50音順）

NPO法人青葉台さわやかネットワーク
医療法人社団潤康会芝パーククリニック
初山別村
太平洋工業株式会社
NPO法人ゆいの会

## 一般ご寄付（6件）

（50音順）

加藤　孟（1万円）
黒田　欽子（2千円）
佐藤　須美子（1万円）
東友会・関東支部ボランティア部会（10万円）
八坂ふれあい拠点企業組合（5千円）
安原　久咲子（1万円）

## 子ども・子育て市民委員会ご寄付（2件）

（ご寄付日付順）

匿名希望（5千円）
学校法人今治普門学園（3万円）

# さわやか活動日記（抄）

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC＝生活支援コーディネーター

column

## 住民中心のメンバーで第2層協議体を編成

**福井県越前町** 担当　共生社会推進リーダー・髙橋　望

5月23日の夜に、福井県越前町宮崎地区で第2層協議体が産声をあげた。

越前町は人口約2万人、福井県随一の水揚げを誇る越前ガニ漁と、日本六古窯に数えられる越前焼が盛んなまちだ。

同町では現在、小学校区圏域での第2層協議体を編成中で、宮崎地区は町内2つ目の協議体となる。メンバーは「協議体に参加して地区を良くしたい」と自ら手上げした住民で構成されている。協議体を住民が自発的に集まるチームとするために、編成する前にまず、地区の住民に向けた勉強会（協議体準備会）を行っている。「地域のささえあいを考える座談会」と題されたこの勉強会は、住民が集まりやすい時間帯である平日夜間に開催、丁寧な説明と住民同士が話し合う時間を確保するため、3回に分けて実施された。宮崎地区の協議体は、この勉強会に参加し協議体メンバーになることを表明した住民を中心に構成されている。

住民の想いがあふれた越前町宮崎地区の協議体準備会

越前町ではこれまで「住民活動を推進したいが方法が分からない」という悩みを持っており、昨年度、福井県のアドバイザー派遣事業（地域支え合い生活支援体制整備事業）に相談支援を依頼した。相談の1回目は、行政担当者と町社会福

社協議会を対象に「助け合いの創出」に向けたオンライン勉強会を行った。この勉強会では、助け合いが具体化していくプロセスを説明、住民主体の動きをつくる必要性を伝えている。2回目は、今後の具体的な展開について意見交換を行った。その結果、住民への仕掛けを行う第2層協議体の編成が必要だとまとまり、まずはモデルとして城崎地区で第2層協議体の編成に向けた住民勉強会を行うこととなった。

福井県のアドバイザー派遣事業の特徴は、相談対応後の実践も重視していることで、本勉強会も県の支援により実現している。城崎地区では、コロナに配慮しながら全3回の勉強会を開催、昨年11月17日に第2層協議体が発足し、現在は月1回のペースで集まり話し合いを継続している。今回の宮崎地区は、県の支援は終了したが、城崎地区での手法をモデルとして町と町社協が一致団結して勉強会の実施に取り組み、本年2～3月にかけて開催、発足にこぎつけたものだ。

宮崎地区の「地域のささえあいを考える座談会」に参加した住民からは、「みんなで考えること、みんなで話し合うことが大切」「ありがとう！と喜ばれることはうれしく、生きがいになる」「より一層地域のことを良くしたい」など、想いあふれるたくさんの声が寄せられている。これからの協議体での丁丁発止のやり取りや、立ち上がった活動に大喜びする住民の姿を想像すると、宮崎地区の住民ではないけれど思わず顔がほころんでしまうような現在となっている。

column

## 伸びしろがいっぱい!!
## 行政・社協・包括が手をつなぎ、住民と共に動き出す
### ～事業関係者の意識～

**■京都府与謝野町■** 担当　共生社会推進リーダー・目﨑　智恵子

京都府与謝野町は、その名の通り与謝野鉄幹・晶子夫妻ゆかりの地。2006年に加悦町・岩滝町・野田川町が合併して誕生し、南北約20キロメートルの間に町並みや集落がまとまり、隣の宮津市にある日本三景の一つ、天橋立（あまのはしだて）が見下ろせる公園もある。

21年10月、京都府のアドバイザー派遣による住民勉強会支援のため、この与謝

野町を訪問した。人口約2万1000人（21年3月末現在）の同町でも、高齢者世帯や認知症高齢者の増加、核家族化や孤立化等の問題が多様化・複雑化している。

与謝野町２回目の勉強会（昨年12月）でのワークショップの様子

そのような状況の中でも、暮らし慣れた町で生活を続けるために、「地域の支え合い活動」について知識を深め、さまざまな『わ』を広げ、お互い様で支え合うまちを目指すために、この日の住民勉強会開催となった。

与謝野町は18年から生活支援体制整備事業に取り組んできたが、コロナの影響もあり、協議体発足に向けた勉強会を開催できなかった。だが、事業の委託先の町社会福祉協議会が、区長・民生児童委員・高齢者サロン利用者・ボランティア連絡協議会・福祉委員などを対象にニーズ調査を実施し、社会資源マップ『よさのなんでもおまかせＢＯＯＫ』を作成。この社会資源マップには、81団体の協力が得られている。コロナ禍でも事業を推進するためにＳＣだけに任せず、社協全体でフォローしながらできることから進めてきたことは素晴らしいと感じた。

そしてこの日の勉強会は、住民の意識アップを目的とし、住民約75名が参加した。行政・社協が力を合わせ、住民と共にこの事業を進めていけるように、当財団は事業の必要性について事例を含めて説明した。行政からは与謝野町の現状について、社協からは今までの取り組み状況について伝え、住民と共に支え合いの町を目指す第一歩となった。関係者（行政・社協・包括）の事業理解や規範的統合が進まないと、関係者が〝できないこと探し〟になってしまうこともしばしばあるが、与謝野町の関係者は決して後ろ向きでなく、みんなが「コロナでなかなか進まなかった分、伸びしろしかない!!」と、笑顔で前に進もうとしている。この思いはきっと住民に伝わり、お互い様の支え合いが広がっていくと実感した。

行政の包括職員の意識も

高く、2回目の勉強会と地域ごとのワークショップに包括職員が全員参加し、住民と一緒に地域の状況について意見交換していたのがとても印象的だった。住民からも、「移動支援をどうにかしたい」「地域のつながりの中で、おっさんクラブをつくろうと思っている」など積極的な意見が聞かれた。まだ始まったばかりで紆余曲折はあると思うが、元気で明るく取り組む与謝野町にエールを送り、財団も支援していきたい。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

## 住民勉強会から第2層協議体を立ち上げ

### 第1回 勉強会開催

### 埼玉県秩父市

【4月18日】秩父市で第2層協議体の第1回が開催され、当財団も運営支援を行った。

同市では今年2月に住民フォーラムを開催し、2月と3月に1回ずつ住民勉強会を実施して協議体を立ち上げ、この日が第1回の協議体開催となった。今回、協議体として立ち上げた第二中区の第2層協議体委員は10名（この日の出席は7名）だが、その他の3つのグループでも各5名の協議体参加希望者がおり、人数は少ないながらもやる気のある人たちが集まった。

今回は、3月に実施した住民勉強会の振り返りを行った後、埼玉県が作成した生活支援のアニメーション動画を見て参加者の緊張をほぐし、地区ごとに分かれたグループで活発な話し合いが行われた。各グループでリーダーを決め、その後はリーダーが中心となって、協議体の愛称を付け、目指す地域像を話し合って、どんな地域にするために活動していくのかについて意識統一を行

第二中区の構成員らが集まった秩父市第２層協議体（第１回）の様子

った。

今後は、まず現在の委員を核に話し合いを続け、各委員が「この人」と思う人に声をかけていくことを前提とする。次回も地区ごとに分かれたグループで具体的な活動の進め方について話し合い、全体発表で互いの情報を共有する。財団も参加し、情報提供やアドバイス等を行いながら進行に協力する予定である。

（岡野　貴代）

## 第2層協議体で勉強会開催
## 居場所と有償ボランティアを学ぶ

### 福島県喜多方市

【4月27日】喜多方市山都地区第2層協議体「山都地区生活支援支え合い会議」の勉強会として講演会が開催され、当財団が講師を務めた。参加者41名。今回の講演会では、あらためて協議体において生活支援体制整備事業の共通認識を持つとともに、協議体委員の中でも興味関心が高い「集いの場」の事例を共有することで、今後の協議体活動のヒントとすることを目的とした。

協議体副代表による開会あいさつに続き、代表あいさつでは協議体のこれまでの活動経過として、デマンド交通を利用しての提言やサロンの現場視察などを行い、その中で気づきを得ることを意識して活動してきたことが話された。

続いて財団が講演した。助け合いの必要性と事業についての説明、および各地の集いの場について、協議体が関わって立ち上げた事例、地域でのワークショップから立ち上げた事例、居場所と有償ボランティアを組み合わせた事例などを紹介した。

質疑応答では、「ボランティアで必要以上のお礼をもらうことがあり、負担に感じる」という参加

集いの場などについて学んだ喜多方市山都地区第２層協議体勉強会の様子

者から有償ボランティアの仕組みについて質問があった。財団から、頼むほうも頼まれるほうも気持ちよく助け合うためには、謝金を介したほうが助け合いが進むということから生まれたのが有償ボランティアであること。利用者からの謝金の一部を活動経費に充てて運営する団体も多いこと。今回紹介した事例の謝金は、全額活動者に渡り、活動者が居場所に参加する際の参加費に充てられていることを説明した。

ほかに、体操を主宰している参加者から「家に閉じこもりがちな人を誘い出すには」という質問があり、閉じこもりがちな人を誘い出すことは難しいが、気にかけていくことは必要であることを説明した。

また、全国にある多様な居場所を紹介した当財団の『居場所ガイドブック』を参考資料として参加者に配布した。

協議体副代表は、障がい者関係のNPO法人理事でカフェも開催しており、「さっそくカフェで誰でも来られる参加自由の集いの場を行いたい」と話していた。また、担い手に支えてもらうのではなく、一人ひとりができることで支え合うことが大切であり、そのための基盤づくりとして集いの場は有効であることも気づいてもらえたようだ。

山都地区は活発な意見が出る協議体。担当の山口愛子SCの気持ちも熱い。今後の山都地区に期待したい。

（岡野　貴代）

## 清水理事長、ボランティア・ベンダー協会新理事長就任に伴う株式会社八洋様訪問

ボランティア・ベンダー協会の理事長交代にあたり、本年4月1日付で同協会の理事長に就任した当財団の清水肇子理事長と共に4月17日、株式会社八洋様へごあいさつにうかがった（前理事長は、堀田力氏）。当日は、八洋代表取締役社長・後藤晃宏様、ボランティア・ベンダー協会事務局長・井上卓朗様、八洋常務執行役員法人営業部統括部長・山口明様と同部長・柴田恭伸様にお迎えいただいた。

ボランティア・ベンダー協会は、日常的な行為が自然な形でボランティア活動につながる仕組みを目指して、自動販売機の利用が募金活動となる「ボランティア・ベンダー基金システム」を発案し、1994年4月より募金活動をスタートした。八洋様はその提唱者として発足時から普及活動、団体運営を推進している。募金活動は全国規模で展開されており、発足から29年間で寄付金累計額は1億5000万円超となった。

清水理事長からは、「こ

の支援活動が全国でさらに広く取り組まれるように協力させていただきます」とあいさつがあった。

ＳＤＧｓを着実に推進されている八洋様と共に、寄付文化がさらに広がるよう当財団も引き続き尽力していく。

（玉置　英明）

左から、ボランティア・ベンダー協会事務局長の井上様、当財団の玉置、清水理事長、八洋代表取締役社長の後藤様

**事務所だより**

●財団にある書籍を整理していると、子ども・子育てについて書かれている本がたくさんあった。また、最近いただく投稿なども子ども・子育ての内容が増えており、社会の関心の高まりが実感できる。簡単ではない事業だが、地道に一歩ずつ進んでいきましょう！

## みんなで、誰もが安心して暮らせる地域共生社会をつくりましょう

**当財団は、誰もが安心して暮らせる地域共生社会をつくるために活動しています。さわやかパートナー（賛助会員）として、ご支援をよろしくお願い申し上げます。**

個人会員、企業・団体等の法人会員として、どなたでもお申し込みいただけます。

◎詳しくは、44ページをご参照ください。
◎ご寄付には、税制優遇措置もあります。当財団ホームページのご寄付に関するページ（https://www.sawayakazaidan.or.jp/partner/）をご覧ください。

# みんなの広場

## 出会いの尊さ 新しいふれあい社会を築くために…

安達 聡子さん 61歳 東京都

3月号巻頭言「池田げんえいさん ありがとうございました」を読んで、げんえいさんが亡くなられたことを初めて知りました。

げんえいさんとの出会いは、私がケアマネジャーだった10年近く前、げんえいさんの弟さんを担当していたときです。弟さんは当時62歳、前頭側頭型の若年性認知症でした。周囲から行動の理解が得られず、孤独な生活をされていました。私が担当して、町田市の認知症に特化したデイサービス「DAYS BLG!」に通所し始め、デイサービスの方々のご協力で自立した生活を始めて「やっと自分のことを分かってくれる仲間や支援者に出会えた」と喜んでおられました。

成年後見制度を利用するにあたり、げんえいさんが申し立て手続きをしてくださいました。弟さんの症状が病気のせいとわかり、ほっとされたと同時に、私たちにもお礼を言ってくださいましたが、後見人が付いた矢先、弟さんは脳出血で帰らぬ人となられました。

げんえいさんが、長谷川和夫先生の『だいじょうぶだよ ―ぼくのおばあちゃん―』の絵を担当されたとき、お手紙を差し上げましたら「これも弟の導きですね」とおっしゃっていました。

私は今、地域包括支援センターに勤務し、認知症の方の支援や認知症サポーター養成講座を担当しています。小学校の講座では必ず『だいじょうぶだよ』を読み聞かせて終わります。

げんえいさんと弟さんのご冥福を祈り、ささえあいの地域づくりを進めます。

（掲載にあたり、関係者のご了解をいただきました・編集部）

**お心のこもったご投稿をありがとうございました。故人になってもげんえいさんは人をつないでくれる名手でしたね。安達様とのつながりに感謝です。皆様の地域づくりを応援しています。**

コメント Keiko Shimizu

『さぁ、言おう』投稿募集

# あなたの意見を社会へ生かそう

『さぁ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

## ぜひ皆様の声をお寄せください

『さぁ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

### 常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、ＮＰＯの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について　など

### 投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
  ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

### 送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さぁ、言おう』編集部宛
FAX（03）5470-7755
E-mail　pr@sawayakazaidan.or.jp

**『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です**

**■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。**

**『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。**
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

| | | |
|---|---|---|
| 個人年会費 | Aコース | 10,000円 |
| | Bコース | 3,000円 |
| 法人年会費（1口） | Aコース | 100,000円 |
| | Bコース | 20,000円 |

**公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。**

**■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。**

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

**一般ご寄付をいただく場合のお振込口座**

**口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団**
**郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※**
**三井住友銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号２７５４５７４**
**みずほ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３３８３３２６**
**三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４**
**りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７**

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

＊お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話（03）5470-7751　メール　mail@sawayakazaidan.or.jp

## 表紙絵から

はり絵・池田げんえい

「緑雨」北鎌倉（神奈川）

編集後記●「子ども・子育て市民委員会」シンポジウム第２弾、多くのご参加ありがとうございました（表紙裏、Ｐ４～）。●「活動の現場から」は徳島県鳴門市。ＳＣと行政の後方支援もあり、３か所の居場所が「暮らサポ」として活動しています（Ｐ11～）。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は神奈川県川崎市から。思い切りどろんこ遊びができるなんて、うらやましいですね（Ｐ19～）。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」の今秋開催が決定しました！　詳細は追って本誌等でご案内します。どうぞご期待ください。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

吉永　みち子

母子家庭で育った私は、
母から「人に頼るな」「弱音を吐くな」と
言われ続けてきた。
多分、強くなれという励ましだったのだろう。
だから「助けて」と言えなくなった。
でも、ひとりで抱えるのはしんどい。
「助けて」と言ってもいいじゃん。
誰かの手を掴んでもいいじゃん。
たくさんの手が差し延べられる世の中がいい。
だって人間はそんなに強くないから。
今は、そう思っている。

●ノンフィクション作家
５年ほど前、膝を痛めて歩行困難になって以来、ラジオ体操にはまってます。歩けるようになって散歩の楽しみが追加され、みんなに勧めています。近著『老いを楽しく手なずけよう　軽やかに生きる55のヒント』（中央公論新社）

さわやかおう 6月号

通巻358号　2023年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さあ言おう 6月号
令和5年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻358号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

地域共生社会に向けてジャンプ!!

# いきがい・助け合い オンラインフェスタ2023

## 10月に開催します！

これまでの３回の「いきがい・助け合いサミット」の提言を生かしながら、各地の実践を深めることを目的に、今年10月、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」を全面オンラインで開催いたします。

皆で一緒に、語り合い、実践ノウハウを学び合いましょう。

乞うご期待！

◆詳細は決定次第、
本誌や財団ホームページ等で
お知らせいたします。